あさ 9

2019

予後の目が秋果を絵筆に捕へけり

踏切に車椅子佇む秋の夕

病みし間の絵具の硬さ秋の暮

煎餅は耳で味はふ秋日和

秋めくや葉擦れの音に目覚めけり

小柄にてフランス綴を秋の夜

秋出水掘割あふれ下駄流れ

絵と俳句・関合正昭

あと

九　月

須賀忠男

絲櫻

東京　佐藤　喜孝

ひと枝も天に向かはず絲ざくら
日の落ちてなほ日をとどむ櫻かな
阿彌陀籤折れて曲がりて梅雨穴に
鳥たちと枇杷食ふ木もゆらゆら
ことしの枇杷は泪のかたち澤山食べ
木の枇杷を食べる鴉が隣にて
水鳥の二羽三羽ゐる木下闇
風鈴や路地の隙間の佃島
海開どこかで君が代行進曲
しぐれより舊きピアノのひとりごつ

東京　須賀　敏子

ヘリ飛来

一冊に短編十二夏の月
さみどりの稲のそよぎや夏の月
月涼し塩原の湯の掛流し
青那須の長き下りやヘリ飛来
絣着て句会へ急ぐ白日傘

東京　田中　藤穂

竹落葉

竹落葉銀の蒔絵となる静寂
雛梟百羽見てきし夜の熟寝
大銀杏の乱れ涼しく一礼す
緑陰や声おだやかに看護師と
医者へゆき庭掃き夏至のまだ暮れず

三重　長崎　桂子

舟虫

舟虫や右へ左へ逃げ去りて
舟虫や流木めぐり隠れたり
上り下り全部窓開ける梅雨晴間
新樹光明日はあると教へらる
草青む小さき命の潜みをり

東京　森　なほ子

友の葬

葉に沿うて曲がつてゆきぬ蝸牛
渋滞を友の葬へと朝曇
夏痩せにあらず柩の友のかほ
雨三日朝顔市をニュースにて
オカリナの音すぐ止みぬ梅雨の午後

青蔦

東京　赤座　典子

緑陰に入り幌上ぐ乳母車
梅雨明けて線路の光尖りをり
赤紫蘇を五束買ひ込む女将さん
白燦々青はせつなし大花火
青蔦や二世俳優父に似て

想出になる枇杷

埼玉　秋川　泉

唐黍や朝靄の中動くもの
深便の枇杷にざわつく白鼻心
大家族緑蔭のもとつどひけり
夏祓祢宜は傘さしくぐりける
雨もよひ曲家に咲く半夏生

サングラス

埼玉　大日向幸江

万歩計携へ歩く土手の夏
筍の疲れを知らぬ青天井
梅雨晴間道にはみ出すゴミ袋
曲り角媼が掛けるサングラス
暑中見舞絵手紙に書く遠嶺かな

長尻雨

東京　七郎衛門吉保

水無月を手招きしたき長尻雨
梅雨最中子等と下見のランドセル
逆上り見得を切る子の玉の汗
泳ぎ子より大きな声のプール番
向日葵や天を目指して傘をさす

東京　篠田　純子

腐草為蛍

家鳴りぴし関節コキと梅雨長し
検査台涼しバリウムほの甘し
腐草蛍と化するころ無音界
夏休アドバルーンのゆぅらゆら
生身魂酒を飲む時ショッキリす

石川　定梶じょう

蚊取器

手の甲や予感蚊に狙はれてゐる
満月に負けるもんかと水母かな
氷店旗ひるがへる叛旗かも
豆腐屋のらっぱ高らか巴里祭
ヨブ記読む電気蚊取り器オンにして

佐藤　恭子

かすみ

天からの母のほほゑみ山はかすみ
小石蹴り春愁の中入りこむ
梟のころんと動き目を合はす
細波のめぐりめぐりて梅雨の鳩
歩くたびレッサーパンダの尾に枯葉

前月抄

茶柱のかはり猫の毛春をはる　佐藤喜孝

満てばひき引いてはみちて火の螢　定梶じょう

松蟬やほったらかしの湯に入る　須賀敏子

紫陽花に触れては笑ふあんよの子　田中藤穂

人影なき宿場の石碑青嵐　長崎桂子

枇杷染の布を織る人緑さす　森なほ子

いくたびも席を譲られ六月果つ　赤座典子

豆ごはんぷっくり炊けし雨の朝　秋川　泉

道端に夏大根の花の咲き　大日向幸江

雪笹を緑濃く茹で緑雨かな　七郎衛門吉保

インカムに機密情報草いきれ　篠田純子

ゆったりとあいづち踊の宵　佐藤恭子

喜孝抄

エイマ

七月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

橡若葉湯氣もゆたかに饅頭屋　佐藤　喜孝

今回も越後湯沢の話からスタート。他の温泉町と同様に、何軒もの温泉饅頭屋さんが軒を連ねている。白いゆたかな湯氣をもうもうと出し、客の気を引いている。橡の木からは、饅頭を小振りにしたような大きさで、饅頭と同じような茶色の種が採れる。種に比べてその若葉は、グローブのように大きくたわわな葉が、林をゆたかにしている。この春に草津温泉に行かれたと聞いている。その折の句だろうか。（吉保）

もつれあふ足湯の指と春日ざし　佐藤　喜孝

歩いた後に足湯につかると、その瞬間疲れがすうっと湯の中へ溶けていきます。心地よくなった足を動かすと、湯と暖かい日差しがきらきらと混じり合い、自分の足がいつもと全然違う白さで輝いていたりします。それが不思議でつい長居をしたり、のぼせてしまったり。それも楽しい旅の思い出となります。（典子）

神田祭きつねの面の若い衆　篠田　純子

ＮＨＫＴＶ番組の一つに「クール・ジャパン」がある。在日外国人の目から見た、日本文化の良し悪しを含む紹介番組で、直近のテーマが「神田」だった。この二月ほど前に神田明神を訪ねる機会があり「なんで外国人が多いの」と疑問に思っていた。番組の中で宮司さんの「神社はエンターテーメントの場」の一言で氷解した。句の中七は、私には鼻の高い外国人に見えたりしている。（吉保）

マッチ箱のこれは茄子の種のはず　定梶じょう

戦後暫く、東京新宿にあった我が家の庭でも、野菜つくりが続けられていた。その種はマッチ箱に収められていた記憶がある。鼠色した細長い種の映像の記憶もある。今は野菜作りに全く縁のない私は、茄子の種をネットで調べてみた。種の大きさは分からなかったが、茶黄色の丸く薄い形をしていた。そして何十年たっても種はマッチ箱に、が続いていることが可笑しい。（吉保）

夏場所や一喜一憂北勝富士　須賀　敏子

お相撲さん北勝富士が、敏子さんの地元である所沢出身だと教えてもらいました。応援する力士がいることは、張り合いのあることです。勝負に勝った時には家事もルンルンとはかどりますが、反面そうでなかった時は中々気力も戻りません。先行きも不安です。まさに一喜一憂。心から共感しています。（典子）

二階バス新樹に触るるばかりなり　　田中　藤穂

若葉が美しい季節に、二階バスで観光をされた由、他の句から推察すると、鎌倉へ行かれたのでしょうか。見える景色がこうも違うのかと、さぞかし感激されたことでしょう。背の高い方は普段から、こんなに遠くまで見渡せているのか等々、興奮なさったのでは。先日知ったのですがレストランバスという、二階バスもあるそうなので、夜景とワインを楽しみながら、ぜひ乗ってみたいと思っているところです。（典子）

膝入れて居眠りおそふ春炬燵　　長崎　桂子

愛用本に掲載されている同類の「春火鉢」は七句、「春暖炉」は五句に比べ「春炬燵」は二十九句で格段に多い。そこに読まれている言葉を拾い出してみた。生産性ゼロの話題・ひろげつぱなし・一日伸ばし・触れずじまい・思いつつ・額ふせ・平凡と云う・等々まで、何もしないことを詠んでいる句が多い。作者もこれらに劣らず、立派に何もしない句を詠んでいる。（吉保）

四阿に街の音聞く薄暑かな　　森　なほ子

庭園などにある、四阿は小高い見晴らしの良い場所にあって、散策の途中に一休みするのにはもってこいです。中央の高くなった屋根には、自然と音が吸い込まれてきます。作者の休憩した四阿は、

都心の公園だったのでしょうか。暑くなる前のひと時、都会からの音に、しばし身を委ねられたのでしょう。（典子）

カステラのざらめを刮ぐ立夏かな　　赤座　典子

「刮」の字形が面白い。舌と刂（りっとう）で牛タンを思ってしまった。「こそぐ」の音も面白い。余り使はないし聞きなれない。舌で刮ぐやうに見えるが、作者はまさかさうはしない。句に戻る。あのザラメの感触と「刮ぐ」といふ動作に今までにない立夏が詠まれてゐる。（喜孝）

春の野に地下足袋で出るめでたき日　　秋川　泉

ここでいう「めでたき日」とは、新元号誕生を指しているのだろう。この時に世間様の多くは、綺麗な言の葉を連ね、気の使い過ぎではと想うほどの言葉選びをしている。しかし作者はそんなことはしていない。地下足袋という農耕民族の基本アイテムを正面に打ち出し、強く地面を踏みしめて、それを一句にして祝っている。この発想の素晴らしさに敬意の一言。（吉保）

旧道の途切れる辺り滴りぬ　　大日向幸江

旧道を歩き続けて広い場所へ出たのか、広い道をずっと行って旧道の見える所へ出たのか、色々と想像をしてしまいました。勿論どちらでもないのかもしれませんが。途切れたあたりという漠然

とした場所に、自然の水が伝わっていた。清涼さにめぐり会えて暑さも吹き飛び、ほっとされたことでしょう。都会には無い静かな風景が感じられます。（典子）

湯の町や食事難民十連休　　七郎衛門吉保

十日も続けて仕事を休める．なんと凄い日本になったのだらう。この恩恵に浴する人はどの位なのか?温泉街で食事を摂らうとしてもども店も人で溢れてゐる。空いていれば不味い。「食事難民」造語かだうか分からぬが、賑ってゐる様が分かる。作者は「食事難民」側なのか傍で見てゐる観察者かどちらであらう。「十連休」は季語でないとおもふ。（喜孝）

風鈴とオルゴール

秋川　泉

深山幽谷の山寺。真夏の夕暮れ。かすかに吹き抜ける風が南部風鈴を揺らす。夜の帳につつまれる頃。

こういう時間を過ごしていた頃の私は、生活の中で風鈴を好ましく思っていた。密集した家々の連なる今の生活で私は残念なことに風鈴とオルゴールがすっかり苦手になってしまった。

欲望の星に生きる人間の業としてお許しください。

七夕

定梶じょう

数学史の専門家は、「数える」という技術は指を使うことから始まった、と教えています。但し、開いた指を折ることから数え始める国と、握った手を拇指から立てて数え始める、あるいは小指から立てて数える、等々、国によって違うんだそうです。勿論日本人は拇指を折ることから数をかぞえるわけで、作句歌の経験者には言わずもがなのこと。

『古事記』や『日本書紀』に載る歌は「記紀歌謡」と称して和歌とは別のもの、としますがこれは、定型に固定する以前、実際に唄われたものであろう、とみられています。定型ではないわけです。そして声を和して歌う時は指なぞ折って数えない。美空ひばりや何とか弘さんの歌を唄う時も数なぞかぞえない。

先の世界大戦の時。日本人のスパイを暴くため中国軍は、怪しい人間には数を数えさせたといいます。中国人や英国人は手を握ってから指を立ててゆく、日本人は開いた指をひとつづつ折ってゆく。

秋元不死男に

七夕やまだ指折って句を作る

があり、不死男の義弟にも当たる庄中健吉は、「七夕や」の数字と下句が響きあっている、と評しています。

小学校六年生の時の宿題に俳句が出たことがあって、指折って句を作る私に母が、「字を数えないように努力しなければいけない」と。

後年、句づくりを始めていた私が母の、指折って句を作る姿を目撃。あれあれ、と。

ガラス風鈴　田中藤穂

夏の暑い頃羽田空港の見学に行ったことがある。新しい今の空港は建物の中は隅々まで冷房されていて、歩いても汗ひとつ出ないが、一歩建物の外へ出ると白い飛行場の照り返しと発着する飛行機の轟音で凄まじい暑さだった。

ドアを出て丸テーブルの所の椅子に腰掛けたら頭の上にガラス風鈴がたくさん吊るしてあって、川のせせらぎを聞くような涼しい音を奏でていた。風鈴も今や軒下に一つつるすのではなく、こういうところで生きているのだなあとしみじみ感心した。良い音でした。

軒忍　大日向幸江

風鈴なんて、風鈴なんて美しい言葉だろう。日本人の心に響く音色そして粋な名前。私が最初に頭に浮かぶのは金魚の絵のついたガラスの風鈴。確かまだ子供だった頃は縁日で売っていた。私が強請ると母は二つ返事で買ってくれた。しばらくして大人になった頃から軒忍の舟に垂れて下がった風鈴を自分で買った嬉しかったものだ。そして私を大人だと思った

定梶じょう

秋川　泉

庭の枇杷今年限りの実を食ぶる
梅雨深し枇杷伐採の朝迎ふ
枝も葉もつめし枇杷の木梅雨の月

◎一句目。食べる、よりも熟れた、とする方が。
庭の枇杷今年限りの実が熟るる
◎二句目。止むを得ずの伐採。その朝を迎えてしまった。
◎三句目。「枝も葉も」とありますので、「(枇杷の)木」はなくもがな。
枝も葉も伐りつめて枇杷梅雨の月

田中　藤穂

在五忌のスカイツリーの灯りけり
前を行く人の曲線銀座夏
七夕竹老人ホームの食堂に

◎一句目。あのスカイツリーに在五忌をとり合わせることの意外さ。「灯りけり」も凡のようで凡でない。スカイツリーの灯ともし頃と業平の忌日。関わりがないようでやっぱりないのですが、何かがありそう。

◎二句目。「句中に〈人〉を使うときは気を詰めろ」とは、かつて教わったことの一つ。気をつけろの意。概して省略した方が成功する率が高い。

銀座夏曲線美が前行きにけり

◎三句目。事実を直載に言うことも大切ですけど、一つずらすことで句が面白くなります。

食堂や老人ホームの星祭

篠田　純子

団扇にて曲舞の所作信長忌

一点にひかり集まり山田植う
大王烏賊に追はるる夢へ明易し

◎一句目。本能寺の変は6月2日、新暦では7月。と、まあ私の理解できるのは此のところ迄で、舞いについては一切分りません。しかし良い俳句は、ことばの端々、ことばの気色で分かるもの。「うちはにてくせまひのしょさ」の措辞が充分その働きをしている。ですから、「信長忌」が坐っているかいないかはこの句の場合坐っているとしなければならないのです。

◎二句目。優れた状景句。ことに「集まり」がいい。少し以前なら田植定規を使っての手植えですから一層苗の一つ一つにひかりが集中した。しかし機械植えでもそう違いはない。山田ですからなお一層。

◎三句目。飛躍大胆。季語の坐りも思わぬ処。うまい。もしかしたら純子さん、「(追はるる夢)へ」の措辞に一瞬違和を感じたかもしれませんが、読み慣れたら何でもないこと。

赤座　典子

梅雨空もものかはハーフのアスリート
半時の天日であり蛇の衣
梅雨晴の湯島聖堂宥座の器

◎一句目。「ものかは」は文語的和語。「ハーフ」は俗っぽくて口語的な和製英語。「アスリート」はれっきとした英語。

◎一句目。「蛇の衣」が実に効いてます。それも、少しのあいだ太陽がかかった時の蛇の殻ですから一層季語の働きが大。

◎一句目。「宥座の器」は、金属製の壺状の器のことなんだそうで、孔子が「いっぱいに満たして覆らぬものはない」と、無理や慢心を戒めた。そんな時に使ったという。その器具が湯島聖堂にあったということなんでしょうね。「梅雨晴」だから「宥座の器」が生きた。

森　なほ子

ビニ傘の相合傘の浴衣の娘
北国の湊祭や雨の中
浴衣の子ビニ傘さして行く出店

◎一句目。「ビニ傘」はビニール傘のこと。例えば「テレビ」は、正格には「テレビジョン・セット」といった筈ですけど今は「テレビ」としかいいませんので、俳句に遣ってもさほど抵抗感がありませんが、「ビニ傘」は俗っぽい言い方。口語を駆使する川柳には宜しいが俳句にはどうでしょう。

◎三句目。「ビニ傘」が口語的かつ俗っぽい言い方のわけですから、正格を遣って、浴衣の子ビニール傘をさしてけりならいいわけです。

大日向幸江

夏帽子拾いてよりのお付き合い
夏草の茂みに隠す捨て猫や
梅雨寒の優先席のハイヒール

◎一句目。「お付き合い」。口語的な措辞。無理に文語をつかう必要はありませんが、と言って「ビニ傘」や「お付き合い」は全くの俗言。国語辞典には「誼(よし)み」「厚誼」「交誼」等々、真っ当なことばがたくさん掲載されています。

◎二句目。「隠す」。作句者を消したい。

夏草の茂みに隠れ捨て猫や

◎三句目。優先席に乗車の「ハイヒール」を取りあげて、作者にだからどうした、という考えはないでしょう。ここのところはめりはりをつけたい。

梅雨寒し優先席のハイヒール

須賀　敏子

誘はれて能路金剛の夏怒涛
日傘閉じ銀座のビルの映画館
クーラーを少し強めてミシン踏む

◎一句目。能登金剛にいらつしやったんですね。今年は台風の到来が遅かったため凪ぐ日が多かったのですけど、少し風が吹けば必ず怒涛になります。

◎二句目。日傘を閉じて映画館へ入るのも出て開くのも平凡な景ですが、出て開く方が面白くないでしょうか。

日傘開く銀座の映画館を出て

◎三句目。句は五音、七音、五音で構成されて、一概に言えぬことですけど、後になる程ことばの意味は重くなる。掲句でも

ミシン踏むクーラー少し強めけり

と置いた方が。敏子さんがミシンを踏むことを主体にすべき、と考えていらつしやるなら原句のまで可ですけど。

長崎　桂子

梅雨深む草木受け入れ陰を増す
風の道探りつつ行く夏落葉
溝浚治療の話口口に

◎一句目。「草木受け入れ」が巧み。但し、「深む」「受け入れる」「陰を増す」のように動詞が多すぎますので、工夫を。

青梅雨や草木受け入れ陰を増す

◎二句目。抑揚を付けたい。

風の道探りつ行けり夏落葉

◎三句目。「治療の話」は口語に片寄りますね。

溝浚診療のこと口口に

佐藤　喜孝

もう月はどこかへ去って暑いだけ

小学校の女先生浴衣かな

匕首は九寸五分とか鬼蜻蛉

◎一句目。喜孝さん一流の俳句。月が落ちてのちの夜助けの景ととろうとも半月が落ちた真夜中の景ととろうとも、月が見えなくなってのちに暑さが募る、この感じ方は独特。

◎三句目。日本最大のとんぼにあいくちをイメージ。普通の作者なら「九寸五分なり」とするところを「九寸五分とか」と置いて一つずらす。巧まずして巧む。

七月号はしたて集補遺

佐藤喜孝

田中　藤穂

夏蝶に留守をあずけて入院す

月見草日誌戦争忠魂碑

梅雨の月手術終へたる眼に探す

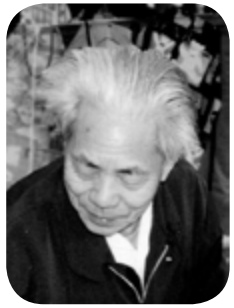
一句目。ひとり暮らしは、家を空ける時人一倍火の元、戸締まりに注意を払ふ。増して入院のため幾晩か留守にするとなると尚更。心細さに偶々庭に来てゐる夏蝶をも便りにしたくなるといふもの。

二句目。忠魂碑に思ひはあるのだらうが、俳句にしてみると素っ気ない。余りにも遠い世のことだからであらうか。

三句目藤穂さんはさきごろ白内障の手術をされた。成功裡に手術を終へられた。手術後結果がよくあって欲しいと案ずるもの。確かめるかのやうに窓辺で梅雨月を探す作者である。花鳥の心を止める俳人ならではの視力の確認法である。

中川句寿夫さんをしのんで　二

雪の戸を余さず廻る刃物売り
十二月八日の朝の素手素足
母屋築百年といふ猫の恋
誰か来て帰ったやうで雨蛙
種なすび好き放題にさせておく
水温む妻によく効く置きぐすり
長老と呼ばれて羽抜鶏とゐる
残る結ひ障子を貼って返しけり
雨蛙板戸一枚開けて留守
畦焼いてその日の匂ひ妻にあり



素晴らしい句がぎっしりと入った「ここのもん」から十句を選べとのこと。深く読み込むことも、技術的な解説も不得手な私には大変なことでしたが、何とか十句選んでみました。

お写真で見る中川句寿夫さんと奥様との日常が思われます。又能登の暮らしがいろいろと想像されて楽しく読ませていただきました。

須賀敏子　抄

二本の枇杷

秋川　泉

里の寺の枇杷樹は、本堂の大屋根に遮られとうとう実をつけなかった。

我が家の枇杷の木は、裏の土地にありながら八メートルにもなる。数年前より驚くほど実を付けるようになった。あまりに高木のため、下の方の実しか人間は採ることが出来ない。薄明かりの頃より小鳥の餌場となり、また夕方も賑やかだ。完熟になると次々と実は落る。私は木の下に行き小鳥のつつき落とすお零れと木が自然に落とす実を拾って、かまわずその場でむさぼり食す。どんな店にもない甘さだ。至福の時間を小鳥と共に過ごす。沢山ある実を小鳥は奪い合うのか、なかなかに喧しい。しかし、私の愛してやまない枇杷の木は伐採が決まった。私の至福の時間ももう少しで止まる。

あをキーワード俳句辞典（はたーはち）

旗

バレンタイン大漁旗のいさみたつ　藤野　寿子
交通整理の紅白の旗櫨紅葉　長崎　桂子
幼児の手旗信号初笑　篠田　純子
庭を掃く国旗掲げる憲法記念日　長崎　桂子
初夏や万国旗揺る起立礼　石森　理和
八ヶ岳颪の町や酒家の旗　井上　石動
何の日の東風が翻弄国旗かな　定梶じょう
むしろ旗進むがごとくに蘆枯れたり　竹内　弘子
冬競技赤青旗門潜り継ぐ　七郎衛門吉保
白旗や葦簀の陰で砂落す　石森　理和
何の日の国旗立ちけり種物屋　定梶じょう
デパートに半旗めくもの雨水の日　竹内　弘子
建売りに未だ万国旗九月尽　赤座　典子

機

機むすび一束結び久女の忌　篠田　純子
夕月夜手機の音のよく響く　森山のりこ
機に浸み帰り燕を見送れず　七郎衛門吉保
蛇穴に入ることもなく機を織る　七郎衛門吉保

バター

焼芋を割れば栗色バター溶け　黒澤　佳子

肌

山肌の褐色に濡れ富士薊　渡邉　京子

やわ肌となる端渓を洗ひをり　関口　ゆき
少年の肌湿りたつ朝曇　篠田　純子
露天風呂肌さすほどの星月夜　松本　米子
砂日傘女の肌は真盛り　篠田　純子
裸木を肌色に描きゆきし人　佐藤　喜孝
岩肌に玉としづくの冬の雨　佐藤　恭子
たなごころにひつつく蝌蚪の柔肌　篠田　純子
樹下を来し肌のうるほひ夏の星　田中　藤穂
稲妻に崩れし山肌また光る　斉藤　裕子
秋の風迷彩色の木肌かな　鈴木多枝子
爽涼やわくごの肌の真珠いろ　竹内　弘子
秋の雨白樺の肌つたひつつ　田中　藤穂
山肌に枯木の影は縦横に　石森　理和
青肌の幹の星屑浅緑　篠田　純子
肌より木の揮発せり夜の秋　鎌倉喜久恵
湯上りの肌ひきしまる夜寒かな　篠田　純子
両肌を脱ぎ子に乳房選ばせる　芝　尚子
芭蕉布を肌にまとうて若わかし　佐藤　喜孝
海中を乾いて泳ぐ鮫の肌　斉藤　裕子
のびさうな肌をしてをり蟇　石森　理和
柔肌の河馬の口中天高し　佐藤　恭子
仮免やモーターショーの冷たき肌　田中　藤穂
秋風や樹ごと樹ごとの幹の肌

秋風や石の肌より母の声　渡邉　友七
ジグソーパズル肌冷やかにプラタナス　斉藤　裕子
体温計風邪気の肌へひやりとす　田中　藤穂
八重櫻木肌うるはし色見せて　佐藤　恭子
冬浅し門前町に肌着買ふ　田中　藤穂
山肌に白い筋あり春の雪　石森　理和
夏めくは夜の湯上りの肌に似て　大日向幸江
柿右衛門白磁素肌の冷たさよ　七郎衛門吉保
芽吹き待つ雑木山肌ココア色　七郎衛門吉保
今落ちし団栗の肌唐三彩　七郎衛門吉保
ゴーヤーチャンプル肌に馴染みし秋の雨　大日向幸江
老若の肌露はやみな灼けて　森　なほ子
冬隣探す肌着のヒートテック　七郎衛門吉保
山肌に添ふも背くも霧立ちぬ　篠田　純子
ヒートテックス肌になじまぬ晴続き　田中　藤穂

はたき

初鴉ハタキのやうに飛んでくる　佐藤　喜孝

旅籠

くぐり戸の低き表の秋旅籠　鈴木多枝子

二十才

凍る夜や二十才過ぎたる子も呼んで　斉藤　裕子

働く

初霜の道急ぐみな働く人　田中　藤穂

倍働けと言ってゐた父生ビール　篠田　純子
コンビニ夜長気働きよき娘をり　長崎　桂子
ご近所も立働きて梅雨晴間　赤座　典子
炎天に働く人の尊しや　長崎　桂子
みかん山生り年が呼ぶ働き手　藤野　寿子
只働くだけとは蟻は考へず　篠田　純子
蚊を打つて働き足りし妻の腕　渡邉　友七
青葉風いざ働けと吹き通る　鎌倉喜久恵
災天や働く人の影の濃く　秋川　泉

はたはた・ばたばた・ぱたぱた

庭に立つ女はたはた蚊を追へり　鎌倉喜久恵
ばたばたとぐるぐる庭に蚊食鳥　石森　理和
ジジジパタパタ蟬跪く道テロ悼む　長崎　桂子

はたり

裏木戸のぱたりぱたりと茗荷の子　篠田　純子

八

結社退く八十六才花盛り　渡邉　京子
青蛙八方に失せこちら向く　佐藤　喜孝
八方に隠れ家のあり蜥蜴の子　早崎　泰江
雪ぼたん七八人のゐるごとし　佐藤　喜孝
生きのびて妊娠土偶露八方　堀内　一郎
空近き郡上八幡瓜洗ふ　芝　尚子
登山靴八方へ散る飛蝗の弧　石森　理和

われ八十大くさめして恥ずかしや　芝　尚子
八幡に十の願ひや七五三　鎌倉喜久恵
八ヶ岳浮びて枝垂糸桜　須賀　敏子
醍醐寺や百八十年の花に酔ふ　竹内　弘子
八階の売場へ金魚昇りゆく　鎌倉喜久恵
店先に水仙を置く八百屋かな　須賀　敏子
春スキー苗場谷川八海山　芝　尚子
八幡の急な石段蟻登る　長崎　桂子
南無八百屋お七の墓の白あぢさゐ　長崎　桂子
白玉のつるり喉越しお八つ時　長崎　桂子
湿度八十余梅雨を這ふ元気者　芝　尚子
八方の秋の彩り濃く淡き　長崎　桂子
そよそよと八丈富士に芒かな　須賀　敏子
やつと抜けて八幡詣恵方道　鎌倉喜久恵
つつがなく八十三の春を待つ　芝　尚子
夜盗虫八部までかな他人の幸　石森　理和
一入と八入の混じる紅葉山　長崎　桂子
十三陵八達嶺と旅はじめ　堀内　一郎
展望の百八十度初茜　長崎　桂子
燕一閃八十といふ誕生日　堀内　一郎
寒星や八犬伝をうろおぼえ　田中　藤穂
銀座八丁けだるく芽吹きそめしかな　篠田　純子
八甲田兵の碑法師蟬　鈴木多枝子

あとがき

青木啓泰君

瀧春一主宰の『暖流』廃刊後、『萱』・『澪』の二誌が立ち上がった。『澪』は時の流れに抗しがたく近年廃刊になった。『萱』にはその時点での暖流の若手が集まった。その内の一人青木啓泰君の訃を誌上で知った。ショックであった。私が父の元で仕事をし始めた頃、啓泰君も家業を継ぐため茨城の江戸崎を出て東京の永福町で修行をしてゐた。何回も会いに行こうと思った。彼は飯野放蕩子・松下道臣らとともに誌上できら星のやうに活躍されてゐた。同人と一会員は私には大きなハードルであった。

暖流で私と同じ頃結婚した長谷川皖司君とお祝いをしていただいた。あれはどこの『鮒忠』だったのだらう。その折の啓泰君の挨拶が先輩然として妻に対する大きな態度を説いてゐた。「白を亭主が赤だと云ったら……」。啓泰君の願望だったのだらう。後輩の私でも無理な話であった。後輩と云っても一年だけ先輩である。永福町時代のすれ違いのままなぜか今日に至ってしまったのは残念。『あを』会員にも田中藤穂さん、斧田綾子さん、竹内弘子さん、大日向幸江さんと暖流で学ばれた方がゐるので、青木啓泰君の訃報を書かせていただいた。合掌。

夏ばて

猛暑を乗りきったつもりでゐたら九月の大颱風が過ぎたらがくんと気力が減退してしまった。遅刊解消一歩手前まで行ったのに残念でした。（喜孝）

二〇一九年九月号
発行日　九月二十九日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）